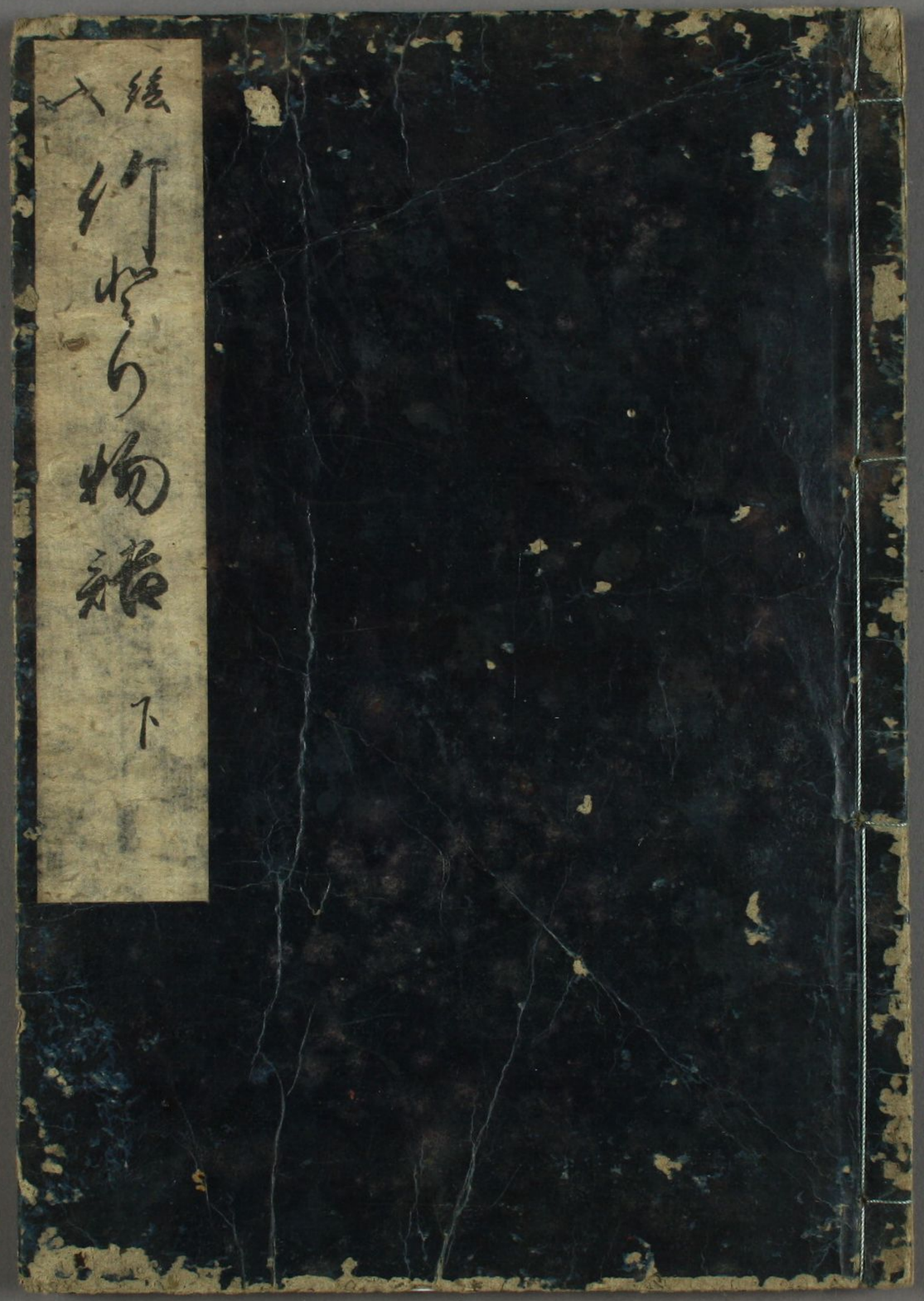

続八
竹ばら物語
下

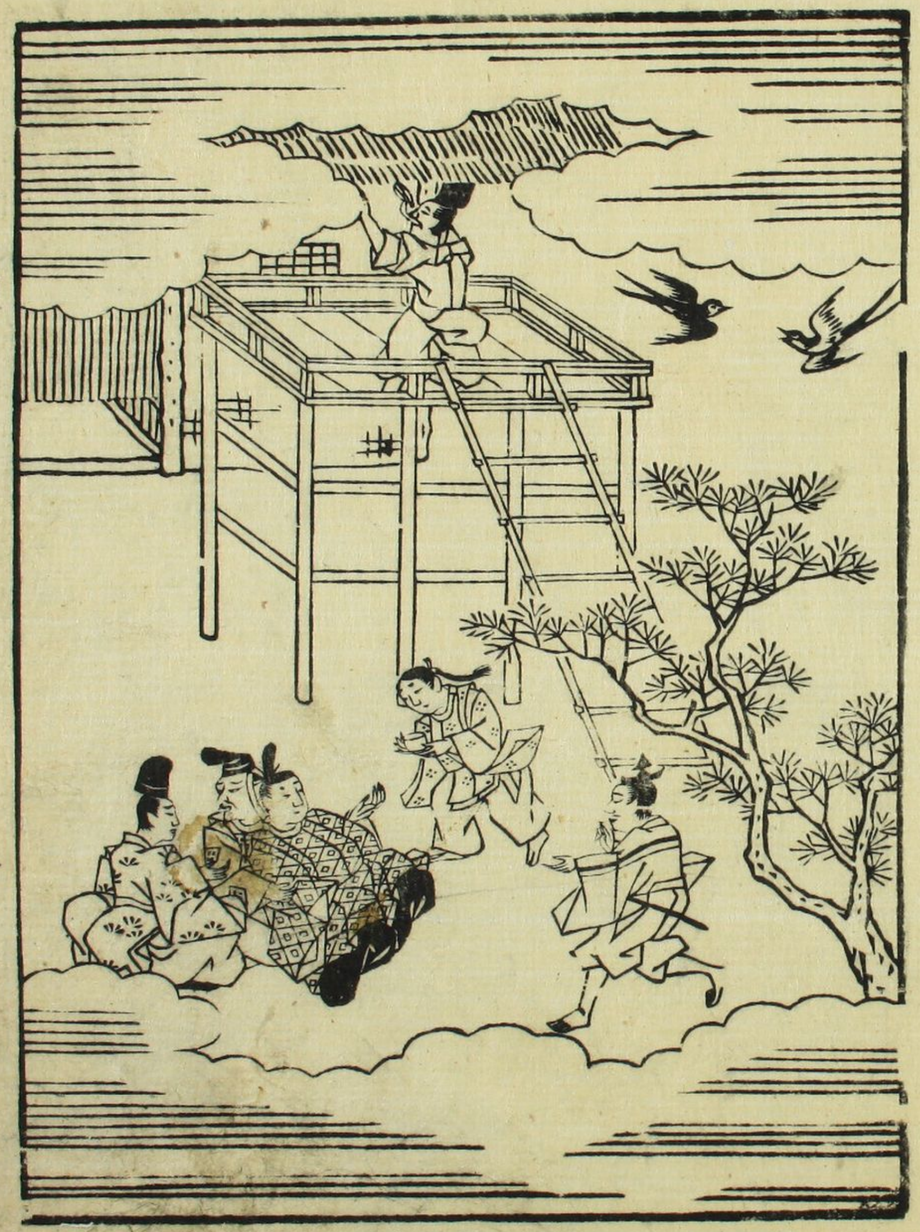
ふけとり物語下

中納言いそのかみまろ

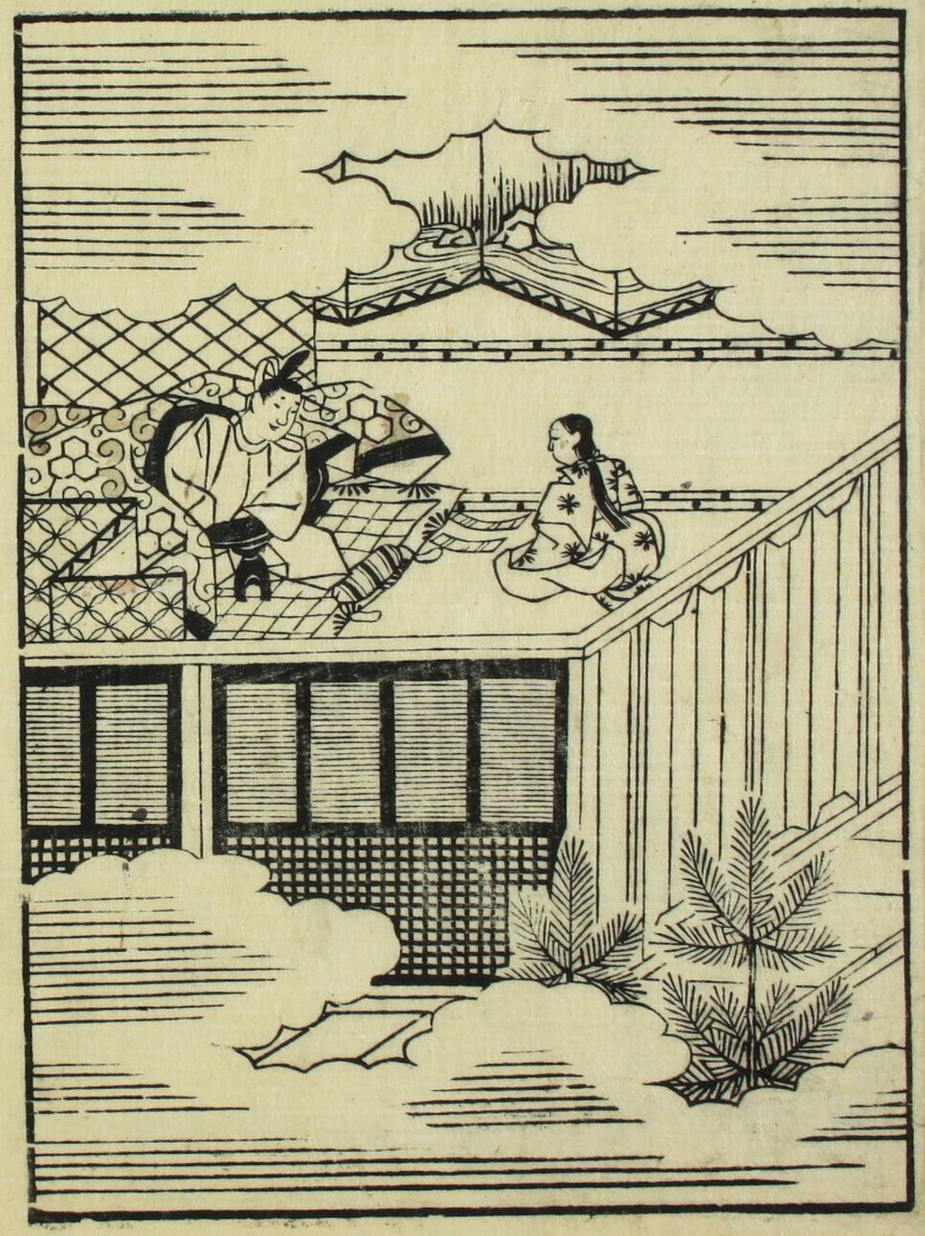
御くしのことをのたまはせくるめれをくひ
きこえはせけるとの給へをあるそうあの用ようの
あるんとも人てのたまへやうはしたくさの
もふかこやに長とうんまてありとのうもと
をれことをこうへさやはしたくめはあまこと
ろーてのうるこうはにはものうりをく
ーるうむはるんいうてうのうるんとも
人うよりんまてう物めぬとーー又人のーー
ものいはうはのいひうをのむのはくの

あれこそにはたとくてゝ先ゝをとくひはらうれよ
まゝ先ゝあゝんをのこゝをとゝひくゝあわてあくゝ城
ゆひあけくうゝいせんようこゝ先はたくゝ先
ゝ海はゝむやゝ御こそとゝめゝまらめせ
ゝ中納言よろこひ給ひて御ゝ幸まも
ゝうれをけゝもえゝさるをうりけゝ有ゝゝ
ゝりとのゝひてまめ所るものことを女人ゝうり
はゝうゝてあゝひよなけをへらまゝうり屋よ
ゝ女ひまなく給らせくこゝやをのゝひらゝ給
うゝをむゝさせゝ給はたくゝめをひとゝ何まゝ
乃ゝり君ゝ給よおゝてをにものゝゝこんかゝ新

よゝのゝ城ゝゝゝれゝ女ゝひてゝゝうゝを色ゝ
とゝゝゝゝゝゝゝよゝははたゝゝの女人ゝゝゝ
こゝゝあゝれゝゝやゝこゝやを見ゝゝんとゝゝめ
ゝはたゝうゝゝんとて御おゝまゝゝれゝ
中納言ゝひをゝゝゝくひゝひ給ゝゝくゝ給
ゝゝゝゝゝゝゝめこゝやを見ゝゝ
ゝたゝうゝてゝゝ殿ゝゝゝえゝゝゝ
給ゝゝあれゝひよゝゝゝくゝゝ女人ゝゝて
給れゝあきてゝゝゝこゝを起せゝ勢給ふ
色ゝゝゝゝゝひをゝこゝ須ゝくゝ人ゝゝゝ
うゝゝてゝめゝゝん人一人をゝゝにのせゝ人



てはるとうまへくきるのようまんるり作るを
作りあけさせてかとこうやをうひとさ〳〵移給ひ
ゑしよかるへきとり中潮云のるまゝやうい
とよ記事ありとてあるひとこの人ん
ありまりてきぬ中潮云くゝ作九よのるまゝ
くはゝくゝめきいりなる時より子孫りひと志
つまてくをはあく魚きとのるまゝくゝ九ゝ桐
作ゝくゝめようまんとるる時き尾を作けて
七度めりてきんうんおとめる梅七度めく
らんありひきあけてその形こやすうひきと
殺せあへとゝ中潮云ようこひ給て方の人



まもなくせいりくみそうにはつうまれのまして
をのこなをの中ゝは海ゝまてゝまるとゆうにあらく
とゝしめ給よくゝ作兄うくゆとのいうくよ
ろこひてのゝまふあくよはうゝ海ゝ人りを
きさゝは福うひをうるのふるのゝ代ゝうきゝさとの
給ひてはそめうきそうけのゝ作さんにようきり
ゝ作うさゝよまゝてゝことの給ゝくゝ作うさゝ川
日蓮ゆ道ハはつうさゝよれたゝて兄ゝよゝ海つ
くゝ兄をうくゝ道うゝまうゝやゝおう
けてめくゝ海あゝこゝよゝとのゝせて作りあけさ
をくつくくめのすゝ海と給ゝくせてさくゝ

よ物ものゝとものよゆゑあるくにたくまきて
すぢをとらくらくれいりあるえんまと
て我乃ほりてたくゝんとの法ひてこのゆゑ
たくれ上つまくうくひあるゝよたくくゝめお
とけていりをめくまるゝあをせくをとくけ
てたくつまゝよをひゝめ物さの歌ゝよ歌
物よりゝり今ハおるゝしてよおをれをてゝり
との法ひてあゝまりてとくおりさんとそこたか
をひさをゝしてつまゝゆ歌ゝるゝやゝ海乃れ亀
のよゝりけさ海よおちたゝ法へり人ゝあさまゝ
りてよりくかゝへゝすまきり法員ハをゝめまて

申法へ里人ゝ水をまくひ入すまかゝゝして
いさおゆへ家よ又うなへ乃よりまをり是を
してさけおろゝ！すゝからゝして師ゝくちを
いかゝ。おほすゝ。ゝ宅とゝくをいきれゝまて物へ
お見ゆをとおゝゝんうとかきめたまをとこやを
貝をゝとゆさりもゝれをうきゝくゝ海ゆゝを
まゝおをくゝしておゝ。のゝいゝゝんとたゝをゝ
けて法をとひろけ法へゝよたをくゝめのま
ゝををゝゝるくをとゝまきりゝ海なりゝりて
を我乃人法ひておゝゝう乃ゝのまやとのくまひ
けるまりそ思ふよをゝう事とはかをなゝ宅

云けるかひとまあらんとかんがへるよりほかなし
もうち初くうつひつ乃あさよりはらきあつ毒く
もあらまほしき腸をおもはまよりうち中絹言色いくいけ
ふるまさしてあるひこと我人りきうせーと志
所ひろれとうまをやまひそいとよつくなり
給ふよりうひをえとうにちりよけるまりを
人乃きくまうりん事と日よりへくおりひあひ
きれたくよやこ志あるうり色人きくこうつ
ーハ光こあるよまりけまこ逆とかくあひめ
ゆてこうひよあるこ式
事伐色て波立ぬとこ乃江ん

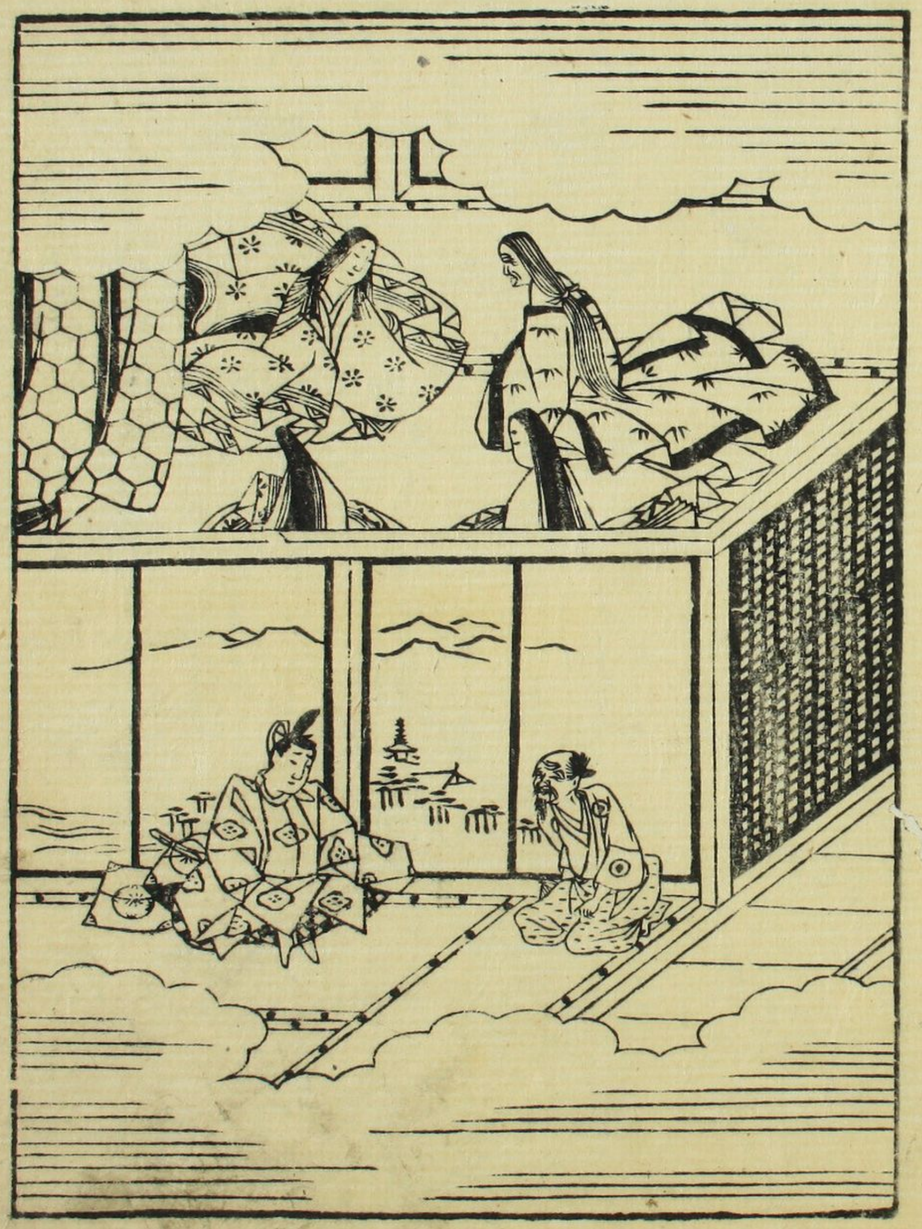
まりのひなーとくくを波ーとり
とあるをよみくこうの次いとこうの紀ゆよかーら
そうけて人よりこ我ものせくくるーこくこうよ
らうーーてくさあよ
かひ色うくありけり絹とわひこてく
志ぬるいのちををくひやこせめ
と書こつくこそし入給ひぬ色をゆてかくあひん
おわるんまとおあーこうあまこうあんねうまき
き事ーとはうあありとは云けるかかくめひあ
かこも乃逆よ波をめてくきるをんうゆくきこ
しめて内給ありとこの之こよの給おかく

乃人の男をいろいろなすてあいさつ屋うく屋
ひめきいろはうち氏女さとまうてゐんさくまい
きとのゆふあさこゆくくまうれうふけしりのもの
よ畏てもやうじいきてあへり女よ内分の給ひ
給るよかくやひえ乃うちいうよおとたうり能
ゐんさくまいうへきすーの給をせ給るかちん寺り
給るといをもちふかるとゝ給ん寺といひてへ
ぬくくやひめふをやうは氏御使よさいめんー給
ゐをといをうくやひめうきうちゆとあうよい
くくの乃んゆゐきと以ハいうてものくまふり給
御門乃御使をハいりてりを給りせんとつハ

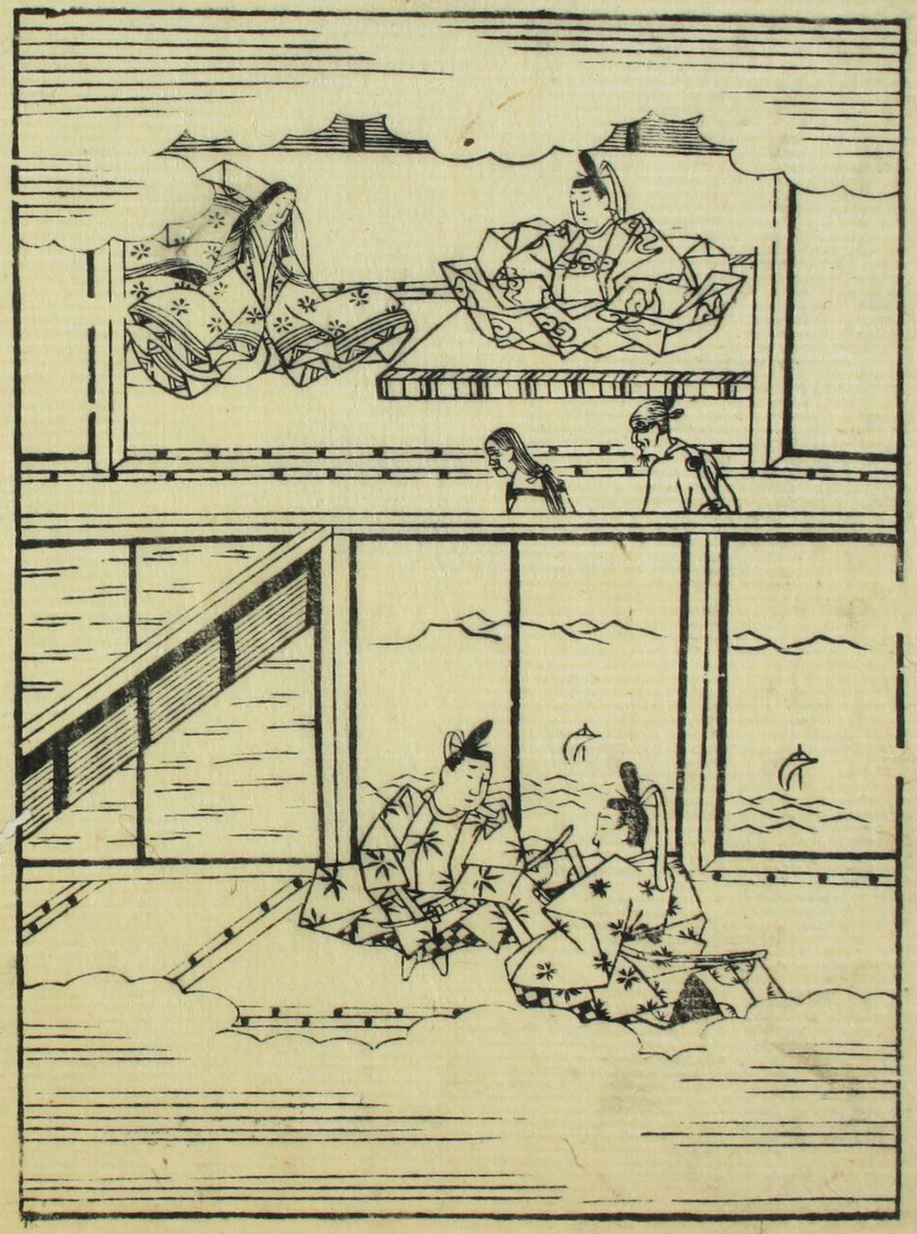
くや部乃のおふ部乃御門のめーてのさ
まいんるりこうたおりんたとゆひくはうよ
乃ん内へくをあうたむめ御ふ乃屋うまあまをを
いとふいをうーけよをうりなるやうよいひ
きれたいのまうにもえせあをかいーのりうん
御りゆをくはゆくこのうきな部ものいこりく
給り先ふまてうひめんすまーきとりるいーり
ううたん乃寺りてまいまきと給こをたこくる掛をゐん
なをてハりてり御りとあうん國主乃仰事を
まうに世よ給給りん人乃部ゐまりくありあん
やいをきぬことなーを給ひそとをとをいちーく

云けるを八是をきゝて涙くかくやひめゆゑなく
もあるべし国王乃侍ゆをそむくべはやあろし
給てらりしゝ云ば涙ぐみ物をそうし
涙ぐきこゝめ　そもおほく共人こゝろ〻て行るゝ
そゝりとの涙ひるくやこゝはけきと物おもり
りゝ涙くこゝ此女乃こゝろうまやまろうんとお
ものして侍ゆゝ涙の物をて侍るゝくゝ爲ひ給ゆ迄
うかゝりちゝりとこゝをこゝめて侍つひこゝ
ゝゝとかひるくゝんゝ此物よりりかゝるゝひゝく
ゝこゝやゝ涙ゝ八ゝこゝと侍らるゝおゝ物を
侍るゝゝやゝ物ゝ八ゝ人ゝく文仕

侍りゝまゝ物ゝ人ゝくゝ涙ゝ侍ゝ人ゝ侍をゝてまゝりゝひ
給ゝりゝ侍てゝ物ゝ涙ゝ人ゝとゝゝ人ゝ見ゝゝ
て侍ゆゝ涙ゝゝりゝ物ゝ涙ゝ人ゝのゝ物ゝゝゝ物
をゝひゝりゝ物ゝ物ゝゝゝゝ物ゝ女ゝゝゝゝ物
のゝゝゝ物ゝ物ゝゝゝ物ゝゝゝゝ物ゝゝ
羅ん物ゝゝ物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
物ゝゝゝ物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ侍ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



ぬしうり也おもしろ物いしゝ物ゝ掘みもあひゝかゝ
ゐまもまうゐをゐんきまうそは何よりせんさはゐ
たゐをとり交ぜたりゝ人をゝ給ハさゝん死物ゝへさ
ゐうやゐゐさゝといふなゐ銭ゐうゝとりを作ゐま
つゝ物てもゐをやあるを見たまへあまをの人
ろんをゝしなゝろのゐゝ作りをむゐゝくゐまて
ゝゝゐ道ゐのふゐふんりをゐのゝ海りんをす
よ作りん人きゝゐをゝしとゝへをゐおさゝこゝゝへ
てゐ天下の事ゝひと有とを物ゝりとも作命の
あやうきゝゝそおゝゐをゐるさゝりゐれハ物つゝ
うまゝゝゐものゝきゐをゝ作りてゝゝさんゝゝゐく



しまりてゞやう仰のるゝ所りこさに仕まつる
をまいらせんとそつうまり迷ハ文はゝへり
ぬ〻しまりぬ角〻と申こやつこ丸のまま
こまゝ物〻るゝこてもちゝ仕むし山まて丸付
ちるかゝれいらんせを世の人よ物を仕るゝと
うせ所を仕門物世話ゝこやこまろ
あかハ山りこちゝ角世仕りこゆ勇志ゝ角りん
物まそ丸ゝんやとのゝまこ仕こやこまろ
ゝ物ゝと物ゝ世物ゝ仕ゝ仕ゝんよ
とみ越きして仕弱をゝれちんとそうもれハ
仕門仕ゝ日を完て仕るをよ出のゝてかゝや物の

都より八行のさく月法よ光みちてけらるてぬる
爰人ゑ見をゑんとあり〳〵てよけくへ神とと〻
ゐのへてしおりてをゆ〻〻てゑんとこゑ〜めゑく法
らん〜法まはゑくひをくめてそくゑ〻〻せ
まひくゆゑ〻〻とはとてぬくおり〜まきんと
ゑゑゑよかくゑひめゑゑへくそうををの多ハ
ひ國よまて法〜ハこうひ法をめひとぬて
ひり〜ます〜雅くやゆゑんとゑ〻をは門をこの
法あゑむををぬており〜まきんとて法こう〜を
よせゆよひ〜くやひめをとけよ成ぬをう
なくくちおり〜とあり〜てけよ〜〻人よはあう

さりゑるをとおり〜てはゑ〜ん法とゑをはぬてい
ゑ〜をを〻法ゆゑちをとあををゆひひゑう〜をゑんて
ゑふ法ゆりなんと法〜法をゆゑ〜法をハかゑやひめをゑの
かゑちよ歌ぬ法門ゆめてゑくおり〜めはゑて
事〜せ記をめかゑ〜かくゑ世法ゑゑつこ九法
よゑこひゆよをて仕まつゑ百くゑん人〜あゑか
〜いうめ〜ゑうつゑうまゑ法ゑんかをゑゑやひめ
をゑゑ〜ゑをくゑ法ゑりんゑをとあゑををゑおりくあゑ
〜けををとゑ〜ぬをゑゑ〜ゑゑ心ゑり〜てゑんゑ人
ゑ法せゆひゑ法法ゑ〜ゑよをて法ゑうくゑや法よ
法ゑ法ゑゑ人ゑゑ法ゑをうくおををゑして

うひさそとゝ南るかくやひめ姫へ

伝記年

むくらゝゝ人下みを年いなるなる方の

なるようは御れうてなるをとゝ乃ん

あれを伝門伝らんしていかく海り行りんそう

まるく御海さ伝伝心さよよ海多へくもお

伝さまさりけまとは伝りとて歌とゆーのゝへき

よあゝゝもうゝせ給ひぬ伝ひよ伝ゝまろう

人とかんのよおくやひあ乃かりゝよまるへ

くふあゝさりけまこと人よりはけゝらなり

とありけゝ人のうれよおり合まれとくもも

あゝすかくや姫のゝ伝ん乃かりてゝひとり

色しのよりるく伝かゝくまを海り給りと

うくや御光乃伝ものとまを伝又をうきて かゝる

させ給よ伝かりけりをうによくゝらんきこしか

もゝのひて面白くゝ東まよ付ても伝方をうゝ

て伝ゝら伝ゝうやうよて伝んとゝら御りなく

さ光んのよ行ゝよ二年をうまて表の初よりかく

や姫門乃れもゝろう出ゝ海をんくゝのもも

御思ひよ伝御迎ゝ人乃門う御乃海きいむるを

せいゝけまたとまは人まふを月をかんへへ

いみゝくゝ乃ん七月十五日の月よ出ゝて

せちよ拾里へ行くとき也ちうくにたうと海人
人行末のおさまれよはけけくこかくやひめまいも
月をあはれうり給へたはたとなわてはてうす
ゝを行くさあるまいくしく秋風ーうけく事ゝ
ゝ一ゝくゝんなまーせ給へとゝいふ我きてかか
くもひめよ云拾あんてゝ心ちをれてかくもの
を思ひゝゝ拾ゝて月をゝんのゝそうまゝゝ毋に
とゝ云かゝゝ変ひめゝん事はせそん心得そく歳り
給ゝゝてゝ拾をゝうゝさ行ゝへゝさと云かく変
初めゝゝ事よいゝゝりて月まは拾里へかゝゝ
きなゝ見をゝんゝくゝゝ佛行ゝの里ひめゝゝをおはを

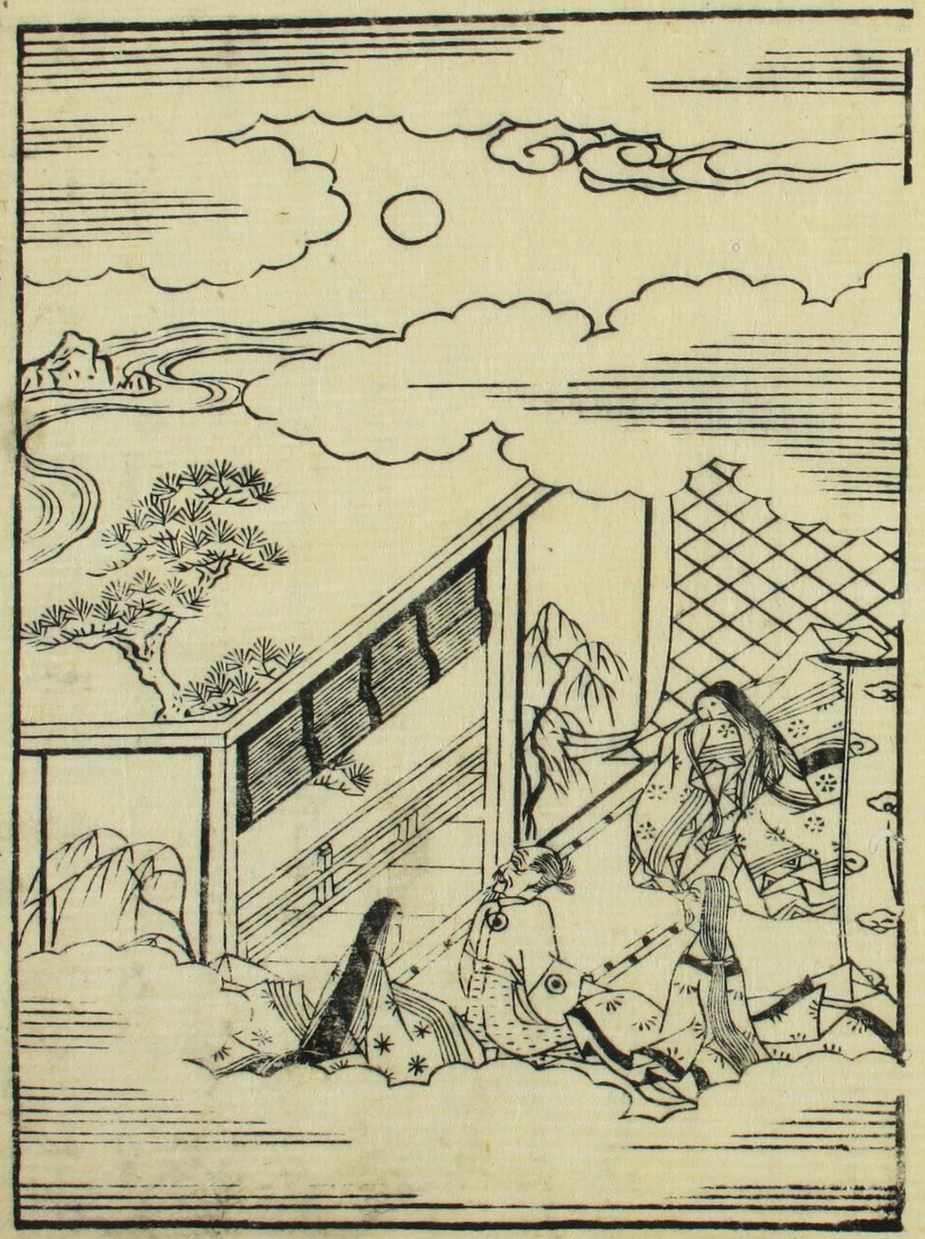
殺ん事一行ゝとゝをといへゝて里ゝ事ゝまゝ拾
ちんんかゝくゝ月ゆゝをといゝゝをゝゝ月かゝん
給ゝを是をゝんゝゝゝ拾おかをゝきいゝをゝと
いへゝいゝて月をゝをゝゝあゝんとゝて行月おれ
ゝ出若行ゝゝけゝ里へ夕やゝゝは拾里いぬ
ゝゝ却是月の程よ必ゝゝ拾行ゝゝをゝ月
きゝゝ紀なゝん見ゝ作ゝすのゝゝゝ紙拾おかゝと
事ゝゝへゝゝゝ変ゝゝ親ゝゝゝめゝく行ゝゝゝも
ゝゝゝ八月十五日のゝゝりの月よ出居てゝくや
初ゝんいゝゝゝくゝゝ紀ゝゝ人見ゝ今ハ行ゝゝゝ給
いゝをなゝきゝゝ見ゝを行ゝをゝゝゝ親ゝを行ゝをゝゝひゝ

らくかぐや姫なく〳〵云先〻も申さんと思ひ
しかどもかならず心まどはし給はんものぞと
思ひて今まで過し侍りつる也さのみやはとて打
出侍りぬるおのが身は此國乃人にもあらず
月の都の人也それをなん昔のちぎりあり
けるによりてなん此世界にはまうできたりける
今はかへるべきに成にければ此月乃十五日に
かのもとの國よりむかへに人〻まうでこんずさら
ずまかりぬべければおぼしなげかんがかなしき
ことをこの春より思ひなげき侍るなりといひていみ
じくなくを翁こはなでう事をのたまふ

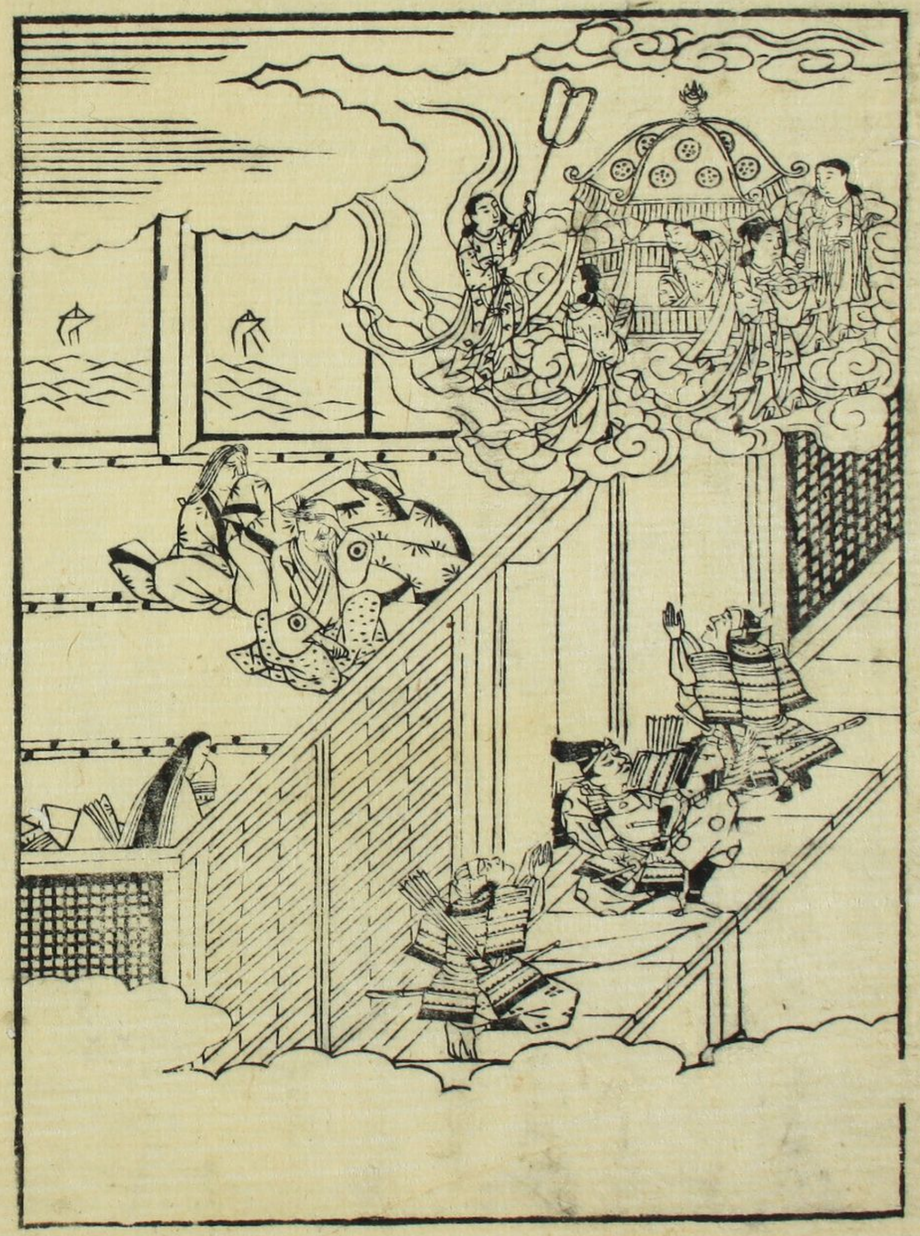
ぞ竹の中より見つけきこえたりしかどなたね
の大きさおはせしをわが丈たち並ぶまで
やしなひたてまつりたる我子を何人か迎へきこえ
んまさにゆるさんやといひて我こそ死なめと
てなきのゝしる事いとたへがたげ也かぐや姫
云月の都の人にて父母ありかた時の間とて彼
の國よりまうでこしかどもかく此國にはあまた
の年をへぬるになんありけるかの國の父母の
事もおぼえずこゝにはかく久しくあそびきこえて
ならひたてまつれりいみじからん心地もせずかなし
くのみあるされどおのが心ならずまかりなんと

ものとおもひなりてまろとともによいこもりうくはたらき
新くにも年はなりひくをとこれなん事をん
ちくとあてやうたうくうはたらかこととを
なりひくこひかんるのくにくゆ水のま
きに同じ心よりけりまこの事を法
門きこしめして行基菩薩はたらかせのの人
はなよ行基出あひてちくく事はあしはるのとる
けくよ到けとちろくあしもかくまり目をたく
きよろれ おろれと年は八十ろりなるとけき
いこと物思ひはかくこれなん若よりにて
つとみ物語つひおほせのとて行基はるの云

伊勢とのくうくく物思ひ嫁を深よりとはるまふ
行基ろくくはしは十又百よあ月乃物うれ
かるを屋敷はむひくへよまきてくれるだくとふ
せあるはは十又日よ八人こ語るまく身は教の人
まりてあくこくへはせんとはは偏りまりく
物をはれ乃ろ物りてそこはたるるはたりを安
石てのの人一月乃行はの一法心よふ三れ行
こあるよ物言乃なれくろかく屋敷めは屋りてい
かくは里へきりの十又月はるきくよは身をて
ちよくはかるる歌のおかくよとこ人をきして
六五のはるきを合くこ二人の人を作しみるるよ



ばうまんこんあるよるて此の桃のよるの人間のよる
千人あまの人こゝにあつまりけるを合てあけつひま
もなくまもりあまたの間人こもら矢をうつ
てたりや乃男は女とともこんよりありてちうん
女めわこめの間よりかくこの姫とりさうくあると
おきれもめりこめ乃戸さしてとちりかり
おさるの云のたりちる彩雲よ天の人よりまけ
ひやといひくこのうへよりある人こよいてく露白
拍うらよりけらはかといちし給へまもる人
人乃云かはうわしてまた間ありうちもち一さ
まあらはまついさ給へてかりちうさんと



おもひ侍るとゝ人おもふかこれをきゝてさのり
うをあり光をきゝてかくなひ光八侍ゝあて
南もり侍かゝ人をきゝてくこをさゝりたあり四
の人を始ゝくらぬるり弓矢してひゝまて
うくゝ侍しこめてあ光は國乃人ゝハみかあゝか
ひとゝおゝくかりんとゝすゝは国乃人きゝゝ
ゝけきん侍ゝう人もよゝあゝゝあゝさけの云侍
侍むゝ為よゝん人ゝはもゝきつあゝてまれゝこと
侍ゝん侍ゝゝきん侍ゝゝゝをゝりてゝれゝゝゝゝお
ときん侍ゝゝりをゝさいゝくゝゝゝのおゝやけ
人よん世くゝゝゝをん世んとゝくゝゝゝあるかく

屋敷いとくこはうとおのゝまゝひとゝ屋のよ
おかゝべたりきくよいとまさかゝいまとうつ
んさゝとうれ思ひをたゝてあるんを海事力
ロおゝうゐりけるとかるれちきりりあるりけ
程なくあぬへさるめりと思ひうゐゝく行る
親をのかるりんをいさくかふたゝまつて
まゝんゝ道もやすくこるまゝまに日はも出る
ておとゝ汁のいゝ海とゝ一つまとゝたゝゝゆる
さきぬよりてなんかるを思ひなけき行るたん
をのこ海とりゝくさりるんるれゝゝくゝ屋
かゝくゐ也れ新の人ハかとけうらよおひを也

とおん田ゝまゝをなく行うゝりたるおへまゝう
所んするをいみゝを行ゝたゝ老おとろへのゝ海
さ海をんなゝさゝむるゝこひゝかゝめといひて
おきかむものいゝさまゝるをそう海つきを
かるさゝ海仮ゆをたりゝとねさゝおりかる
程よゝひおるてねのこゝ汁ゝをかありひろ
のあゝたゝをさて初ゝりゝをゝを月のあゝ
さ我十あわせゝゝ汁すてゝゝ人の毛のあかさへ
んゆゝ程るゝ大をゝあゝ人をゝゝてありさ
てたすゝ又尺ゝりあゝりゝゝ程よゝちゝゝ
さゝ海かあるゝ人ゝんとを物よおそゝ新ゝゝ

まそおそ〳〵かもんの心もなりけるとかうして
思ひおこして弓矢をこわ〳〵てんとをれたるを
力もれくるりくなけく〳〵かりくる事よんかう
者ものねんてのいんとをれたほうさ藤へいさ
けきにあきもたくるをてのゆゑくさまををれく
まりあるりたてゆ人をハかうそくのきよら
るるる物よりも物をとらよ車一くくりらいさ
しりこを事よりまとれかりき人交作こまろ
あるよまをてこいのよりけく思ひつるこやつこ
まろを物よりをひくらちらてうよりよ梅
をりいちく汝おさる犯人ゆかうゆくくと

おこるかけくりけるよりるそゆうを事ますけをとそ
かるゆゆ物をとそくくこの年ゆそこ
殺のこうをものくるを物のあるくるり
よくりかくやひめをゆくるをを作くりの百ものそれ
をかるを物をきをのまうをやをよをりをり
作るをりつをうををてぬををかくむよ
かるおをれいをれるけくあるいぬ事也をや也
をなれとりのれきかをうをくりかくやひめ
を御なひをそをまるるを井金年よゆぬう
ゆとのをのをよあやをを作りぬ又とをよ
かくやゆ姫とを人をおりをまをむとををに

おしてをかくるひめは物のきを病とをぼしたえ
出おりてもとめんとすれどもせてをるはいかゝくく
屋のうへよりゝ車をとゝめてのさかくやひめこそ
うれしけれよりてゝゝへ者なれてせんといひそこめ
ゝる所戸外ゝゝあるはよあるぬかゝしきをと
人をもかくしてをきあぬ女ゝをとゝめるなかくや
姫をよ出あえとゝむまゝしてそれをくさゝわゝ
きてなきおり所とりゝまとをきくるをゝせる所
よりてかくや姫いとゝあくまを心ゝもあるそし
うく海ゝ所よのゝゝぬをとゝ　どよりそり給へとゝ
いとゝも何ゝにこれしよよんをゝるとをもん我

をいかゝふせてをゝてをゝてゝゝをこのかりのかそゝて
ゝてれをゝせをゝとゝるをゝくゝゝををきは法心ををとひぬ
文を書置てをゝう羽ん羽ん羽こひゝかゝん羽ゝこゝ羽
て月ゝ羽へとゝくゝ羽るをゝて出あとは月ゝ國ゝよをゝを
めるゝゝ羽ゝゝるゝ月ゝをゝをぬかをゝて羽ゝて
をゝわゝ羽をめるゝ者ゝゝめをゝをくゝかゝるくゝゝて羽をゝ
め羽をゝくゝ者をゝかゝんゝと見ゝめゝ月ゝ出をゝん羽
を月ゝをゝをゝをゝ月ゝ羽ゝ羽ゝてをゝう海ゝをゝつゝりを
羽めゝをゝんゝちをゝ海ゝと者ゝをゝく天人の中ゝよりをゝを
ゝるゝをゝをゝあをゝ月羽ゝ衣ゝいをゝりゝ又ゝあるゝは不死の
くゝすゝりゝへゝをゝひゝとゝりゝ月ゝこゝ人ゝ云ゝつゝかゝるゝ所ゝくゝをゝわ

なれこそうきを世に抱きこうなきハ法ん花
あしかるん抱うとてうきをうれしいはくこの
ゑ絵を折ひそかかりかんとてぬきまこころもに作く
まんとをれいあ雨天人作いき せんはうはとう
出してきせんとう涙そのあよかくなひめまこ
まそてといひうぬまを世作るへき心ふしに絵うう
ときいふうの一こといひ重へきまあ一まうとこ
てえうく天人をそしとのひとなうあひかく
やはり抱きしぬるなのうまひそていみ一こ
けんまあ月夏けよ清文なりあてぬまま
なりかなをあまうあ人をあひくいうえんさせのへと

ゆ雨さぬむ人まうてきそとりいくこあめまこ
にれしくうれしきまあ一文仕作うまけらに
なりあるもかるまうらうきまあて作まこ
心はをれ浮しめさまこ作うめとんつうく絵へ
雅をるりあ一まうあけするものに思ふうく
めうまめるうんのうりやまりはりぬとうく
今りてあうりあ羽こうをきるはそ
をこうりとはりひてうう雨
やてつかくすりをくうく歌中はをうひませて
なうに中一将よ天人のうりへこりて作ふふ中はとう
作まこいまとあまれ明こうをおきせれりつきは

おきなは涙いと深くうれしがりとおぼしたる事をう
せぬはさるぬこう侍人をも招ひちかくなりりて
うれしく車にのりて百人ばかり天人くして上
るぬこそはおきなは女ちはなみことを引てきと
をとうひ申あれ書をきて　又とうんくきうせ
けきと何せんりう命も申かんたうめよう
何事も申ん申をとてくすりをくらとやう
ておきことあうてやこと申せり中ねんくひき
くして後をまいりく船るや姫を引ぐ申ひと
とめ侍ぬれとこまくとそうすくすれの所
はなはだうへくあまくすひろげて此後しく

いと何ぐきうせ給ひて物をきこしめすこと
はあそひをとをなうりぐいぐん上達部を
めくいろきの山ら天人ちもれとくもせのよ
よあれへそうをするう乃國よあるるふうん
ひ物をらうく天も地うく仏ることくをこれと
きう場ふまひく

あふことをなみてのようう報をまい
をるぬ　をとりしも何りうはせん

むれなる不死のくすりよ文はかくて此後は
給ひをらくくまは月乃いもうきをいう人
とをこしをる月國よあるるのいぐ記よて

寛政八年丙辰五月

浪華書林

心齊橋北久太郎町

河内屋喜兵衛